

2021年7月10日開催
第68回クリエイティブサロン報告(オンライン開催)
「思考力の深化で創造力を育成する」

【 第1部講演会 】

「深い学び」に関する私的・試的・詩的考察
 ～探究的学びを通して～



下町壽男氏：元花巻北高等学校
 校長、教育改革コンサルタント

ゆとり教育の延長のアクティブラーニング(AL)と詰め込みの延長の学力主義との闘いの中で、前者の目指した深い学びは後者のdeep戦略に飲み込まれた！

学校システムや教員文化の中の“deepな戦略的な学び”を、探究的・創造的学びに転換することが必要である。



岩手県の高校で40年勤務された下町先生と東大に45年超通われた原島先生が体験を通じた私的な変化を「学校／大学の中の私」から「私の中の学校／社会へ」として詩的に「探究と創造」を語られた。下町先生はdeep learningでの教科学力強調に警鐘を鳴らし、先生の“深い”「探究」の必要性を訴えられた。原島先生ご指摘の“深い谷”は「探究」通して這い上がることで創造への道が開けるようです。

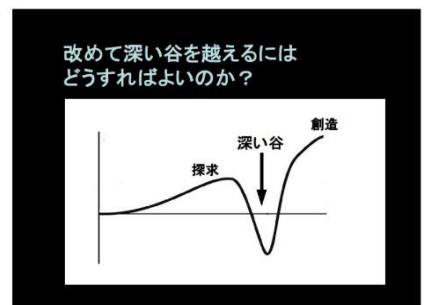
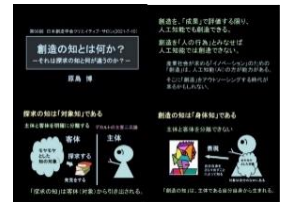
「創造の知とは何か？」
 ～それは探求の知と何が違うのか？～



原島博氏：東京大学名誉教授
 東京大学情報学環元特任教授

谷を超える階段やエスカレーターなどの“手段”が開発されているが、これら“成果”を創造とする限り、人は人工知能に劣る。AIにできない人の“行為”が本当の

創造であり主体による“身体知の外化行為が創造の知”であり、学びを言語化して話すことが創造の原点である。



【 第2部トークセッション 】



冒頭、國藤先生から「正答のない問題を主体的・協動的に解決できる探究力」育成を目指すSSHプログラムにおける主体性評価についての報告があった。続いて討論に。

Art、評価、創造が話題に。「人工知能の作品(成果)を見て感動した主体が言語や評価で意味づけすると、コンセンサス、価値が生まれる。これを創造(Art)と見なしてよいか？」との下町先生の質問に原島先生は「ArtをOutput(作品)で定義するのでなく、人の営みへの感動がベースであり、リアルなものの言葉で説明してもリアルなものの説明にはならない。(例:100m10秒は、速さでなく人の限界挑戦に感動する)優秀な学生は評価すべきでない。」と答えられた。

途中から創造学会永井理事長も加わり、OECD Learning Canpus2030 が問題解決のPDCAのだけでなく探究と同じAAR(見直し・行動・振り返り)重視を紹介、脳の活動＝創造と協働を学会として推進させる決意を語られた。主催の創造学会は、共感を定義に加え、創造力育成を継続検討することになった。

参加者数：61名(約20名がフェイスブック繋がり的高校関係者)

「探究で深い谷を這い上がり創造に至る道」を探した。

司会：齋藤みずほ(キャリア・クエスト/JAIST学生) 企画記録：小粥幹夫(ひとつなぎの会)